A病棟における「看護を語る会」開催1ヶ月後の認識と看護実践の変化

Changes in recognition and nursing practice after narrative-based reflection

A qualitative research.

東６階病棟

田屋香織（TAYA Kaori）　小林玲　中野和美　畔上真子

〈要旨〉先行研究では、「看護を語る会」は承認ややりがいを高めることができる等の効果が示されているが、開催後一定期間をおいても同じ効果が期待できるのかを検討した文献は見当たらない。今回、A病棟における「看護を語る会」開催1ヶ月後に、参加した看護師の認識と看護実践がどのように変化したのか明らかにするため、参加した6名の研究対象者に、1ヶ月後にインタビューを実施し、質的帰納的分析を行った。「認識の変化」について【よりよい看護を目指す姿勢が生まれた】等5カテゴリーが抽出された。「看護実践の変化」については【より患者、家族の気持ちに配慮して話が聞けるようになった】等5カテゴリーが抽出され、その内容は「看護を語る会」で語られた具体的な看護実践の内容に沿っていた。「看護を語る会」は、1ヶ月後も対象者の認識や看護実践の変化につながっており、看護をより良くする意識も高めることに寄与していると考えられた。一方で、印象に残った内容でも実践の機会がなかったり、時間経過により徐々に記憶から薄れていくことも明らかとなり、日常的に看護を語る仕組みを検討することが必要であると考えられた。

キーワード：看護を語る会　認識の変化　看護実践の変化

Ⅰ．はじめに

Ａ病棟における「看護を語る会」は、新人看護師の成長を部署のスタッフで共有することを目的として、「心に残った看護」をテーマに新人看護師を語りの中心に年に1回開催されている。先行研究では、看護を語ることで看護に対する新たな気づきを得ることができたり、語りを聞くことで看護観や実践が変化するなど、語り手・聞き手相互に影響を及ぼすことが報告されている[1)]。また、語り合いを通して、互いに認め合うことができ、看護師としてのモチベーションを高めることができるなどの効果も明らかにされている[2)]。しかし、先行研究で明らかにされている効果は、「看護を語る会」開催直後に収集されたデータに基づく分析結果であり、開催後一定期間をおいても、同じ効果が期待できるのかを検討した文献は見当たらなかった。そこで、「看護を語る会」で得られた学びや気づきは、その後Ａ病棟でどのように活かされているのだろうかと疑問を持った。このような背景から、A病棟において「看護を語る会」開催1ヶ月後にどのような認識、看護実践の変化がみられるのかを明らかにしたいと考えた。

Ⅱ．研究目的

Ａ病棟における「看護を語る会」開催１ヶ月後に、参加した看護師の認識と看護実践の変化を明らかにする。

Ⅲ．用語の定義

看護を語る会：看護師が自分の心に残っている看護経験を語り合う会

認識：看護ケアに対する意義や理解

看護実践：看護師が対象に働きかける行為

Ⅳ．研究方法

１．研究デザイン：質的記述的研究

２．データ収集期間：2019 年 2 月～3 月

３．研究対象者：Ａ病棟看護師のうち「看護を語る会」参加後に同意の得られた 6 名

４．データ収集方法：「看護を語る会」開催１ヶ月後に、インタビューガイドに基づいた半構成的面接法を実施した。インタビューガイドの内容は「語りを聞いて看護の考え方に変化があったら具体的に教えて下さい」「語りを聞いて看護実践に活かせたことがあったら具体的に教えて下さい」等だった。面接内容は、研究対象者に同意を得て、IC レコーダーに録音した。「看護を語る会」の内容を覚えていることと、実践に活かすまでにある程度の期間が必要であると考え、データ収集のタイミングを開催１ヶ月後と設定した。

５．分析方法：面接内容を元に逐語録を作成し、下記のプロセスに沿って「認識の変化」「看護実践の変化」の内容毎に類似したコードをまとめ、カテゴリー化した。

１）コード化：面接内容を逐語録に起こし、「看護を語る会」の認識や看護実践における変化等を前後の文脈を考慮して解釈し、その抽象的な意味を忠実に表すコードを作成した。

２）カテゴリー化：コードを更に意味内容の類似性に従って分析し、その内容をサブカテゴリーとして更に抽象化をすすめた。得られたサブカテゴリーを意味の類似性に従って分類し、その意味内容をカテゴリーとして更なる抽象化を行った。

６．「看護を語る会」の運営方法

自分が語ってみたい、相手に聞いてみたい内容について病棟スタッフ全員を対象にアン

ケート調査を実施し、最も回答の多かった「忘れられない看護」を語りのテーマに設定した。日勤終了後、約 60 分間開催した。参加者（語り手）は新人看護師に限らず、その日の日勤勤務者の中から参加できる看護師を募った。看護経験のエピソードを事前にワークシートに整理し、「忘れられない看護エピソード」「なぜその場面が心に残っているのか」「その場面で自分が行動して良かったと思うこと、もしくは改善が必要だと思ったこと」「その看護を通してみえたこと感じたこと考えたこと」「今自分が大切にしていること大切にしたいこと」を参加者全員が 3 分間ずつ発表した。3 名発表後、10 分間ずつ自由な発言の場を設けた。研究者は主に司会進行、ファシリテーションを行った。「看護を語る会」の開催前に、各自にフリーシートを配布し、印象に残った語り、相手に聞いてみたいこと、感想などを自由にメモできるようにした。ルールとして、相手の話は最後まで聞く、認め合い発言を否定しない、愚痴や不平不満の言い合いにならないようにすることも説明した[3)4)]。「看護を語る会」の参加者は研究者を除き 6 名だった。語りの内容の概要は、「呼吸器装着中の患者のコミュニケーションを工夫したこととその時の思い」「終末期患者との関わりで困ったことについて振り返りたい自分の看護」「終末期患者との関わりで心残りに感じていること」「終末期患者の家族から特に患者の口腔ケアについて指摘を受けたことを機に、患者・家族への関わりについて新たに気づいたこと」「終末期患者の最期の過ごし方について患者・家族の思いが表出できるように関わったこと」「インフォームド・コンセント（Informed Consent:IC）後に患者、家族だけで相談し合う時間を意図的につくったこと」だった。

Ⅴ．倫理的配慮：

研究対象者には、任意参加、同意撤回の自由、個人情報の保護について口頭および文書で説明し、同意を得た。研究は、信州大学医学部医倫理委員会の承認を得て行った。なお、この研究に関連して開示すべき利益相反はない。

Ⅵ．研究結果

１．　対象者の概要

研究対象は、看護師経験年数 0 から 5 年までの看護師 6 名で、面接時間は最短 5 分から最長 16 分だった。分析の結果、「看護を語る会」で聞いた内容を 1 ヶ月後に自身の実践に活かせたと答えた対象は 5 名だった。

２．「認識の変化」について

「認識の変化」については、37 コードから 12 サブカテゴリー、5 カテゴリーが抽出された（表 1)。カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》、コードは〈〉で示す。

１）【1 ヶ月間継続して意識できていた】

〈語りの内容が印象に残っているため、機会があれば今後工夫して実践したいと思う〉〈語る会の翌日から、意識したことが今も自然にできるようになり意識が定着したと感じる〉と、1 ヶ月後も「看護を語る会」の内容を意識していると語った対象者が多かった。《機会があれば実践したいと思う》と機会を探していたり、《意識が定着したと感じる》と、以前よりも看護ケアに対して意識できる機会が多くみられていた。

２）【自己肯定感が上がった】

〈語る会で他者に自分の考え方を認められ、否定的だった考え方を肯定的に考えられるよ

うに変わった〉〈語る会の後、看護に対する自分の考え方をだいぶ肯定的に考えられるようになった〉など、今までの自分の看護に疑問を感じていた部分について《自分を肯定できるようになった》と「看護を語る会」の後に自信が持てるような変化がみられた。

３）【よりよい看護を目指す姿勢が生まれた】

〈他者の考え方や意見を知り、1 ヶ月の中でも少しずつ自分の看護を改善したり良くすることができた〉〈先輩の話の聞き方や聞くタイミングを学ぼうとするように変わった〉という語りから、《自己課題を発見できた》《他者から学ぼうとする姿勢が生まれた》という対象者がいた。

４）【意識は時間経過と共に薄れた】

〈語る会の時はすごく刺激を受けたがすぐに実践できないと忘れがちになる〉〈語る会後 2 週間程は良かった内容を割と覚えていたが、1 ヶ月経つとあまり思い出さなくなる〉〈1 回の語る会では記憶に残すのが難しいと感じる〉という語りから、1 ヶ月の間に《単に忘れてしまった》《日常業務に追われて忘れてしまった》《記憶に残りづらかった》という対象者がいた。

５）【変化がなかった】

〈印象に残った内容以外のことは変わっていない感じがする〉〈語られた内容の一部については以前から気にかけていたことだったため、元の意識のまま改善した気はしない〉と、個人が印象的に感じなかった内容については、これまでの意識と変化がみられない自覚を持つ対象者がいた。

３．「看護実践の変化」について

「看護実践の変化」については、19 コードから、5 カテゴリー【より患者、家族の気持ちに配慮して話が聞けるようになった】【終末期の過ごし方に対する考えを早期から意識して聞けるようになった】【IC 後に患者と家族だけで話せる時間を設けるようになった】【より患者、家族目線に配慮したケアを考え実践するようになった】【ケアの必要性を再認識しケアの時間を確保するようになった】が抽出された（表 2)。「看護実践の変化」に関しては、より具体的な実践がわかる内容でカテゴリー化したため、サブカテゴリーは抽出されなかった。〈語る会から、IC 後に患者・家族と話す時間を設けることが大事だと思い、実践できた〉〈語る会の翌日に機会があり意識的に実践した。IC 後に患者、家族 2 人だけの時間をつくり、落ち着いて話し合える場の設定ができた〉と、具体的な実践の場面や思いが語られた。「看護実践の変化」について抽出されたカテゴリーの内容は、「看護を語る会」で語られた具体的な看護実践の内容に沿っていた。

Ⅶ. 考察

「看護を語る会」開催後に、認識と看護実践の変化があったことが明らかとなり、研究対象者は他者の看護経験の語りに影響を受けたと考えられた。「認識の変化」においては、1 ヶ月後も【自己肯定感が上がった】という語り手への効果や、【1 ヶ月間継続して意識できていた】【よりよい看護を目指す姿勢が生まれた】という聞き手への効果もみられたことから、聞き手・語り手相互に影響を及ぼすという点で先行研究と一致していた。

伊良波ら[5)]は、「ごく普通の看護実践であったとしても、その病棟看護師に意味あるものと映った場合、看護職者としての認識や行動に影響を与えていた」と述べている。本研究も、1 ヶ月後であっても、研究対象者が他者の看護経験の語りを、「意味がある」と感じ

たことから、【自己肯定感が上がった】【よりよい看護を目指す姿勢が生まれた】という認識の変化に至ったと考えられる。他者の看護経験の語りを聞いたことが刺激となり、今後の看護実践のための新たな気づきとなった可能性がある。また、これまでの自分の看護経験と他者の看護経験を結びつけたことで、他者とのやり方の違いに気づいたり看護実践の応用を考える機会となり、これまでの自分の看護実践や看護ケアの認識、意味づけに変化が生じたと考えられる。更に、1 ヶ月後も看護実践に繋げることができていた理由としては、語りの内容が臨床現場ですぐにでも実践可能な身近なものであったり、「試してみたい」「自分も同じようにやってみよう」と感じることができるような印象的なものであったことから、【1ヶ月間継続して意識できていた】ことが考えられた。他者の看護実践を聞くことは、看護観が広がるだけでなく、看護実践に応用したり、看護をより良くしようとする意識も高めることができると考えられる。

一方で「看護を語る会」の内容は、印象に残った内容であったにも関わらず、実践の機会がなかったり、時間経過により徐々に記憶から薄れていくことも今回の分析で明らかとなった。単なる時間経過で記憶が薄れてしまったこと以外に、《日常業務に追われ忘れてしまった》というように、仕事中に余裕がなかったり、次々と重なる日々の業務に追われるうちに忘れてしまう場合もあると考えられた。また、〈語りの人数が多いと、印象に残った話しか抜粋されて残らないが、少ない人数で語れば覚えている感じがする〉というように、個人によって今回の「看護を語る会」の参加人数が多いと感じたり、もっと少ない人数で語りたいと希望する参加者もおり、語りやすさ、参加のしやすさといった「看護を語る会」の運営に対する印象も個人で異なることが考えられた。運営の仕方によっては、看護に対

する高い意識や自分の看護を見つめ直す機会を持ち続けることができると考えられる。そのため、病棟会の前に看護を語る機会を設ける、日勤終了後にペアで 5 分間語り合う等、日常的に看護を語る仕組みを検討することも重要だと考える。

Ⅷ．本研究の限界と課題

本研究はＡ病院における１病棟の看護師６名を研究対象者としたため、データ数としては少なく、普遍化するには限界がある。今回は開催１ヶ月後のデータを分析したが、今後は研究対象者を増やしつつ、3 ヶ月後、半年後等、経時的な変化を追うことも検討されていくべき課題として残された。

Ⅸ．結語

「看護を語る会」開催１ヶ月後も、認識の変化と看護実践の変化がみられた。徐々に語りの記憶が薄れる一方、参加者自身の内面的変化にとどまらず、印象に残った語りの内容から個々が看護ケアの意味づけを考え、看護実践に活かせていた。

参考文献

１）木寺望美，長井万季：看護の語りを聴いた看護師の看護観や看護実践への影響，第 48 回日本看護学会論文集　看護教育，p.122-125，2018.

２）川口加代子，安部陽子：看護を語るなかで知る誇りと喜び　共に育つ「看護を語る会」を開催して，看護実践の科学，33(1)，p.66-69，2008.

３）下村晃子：看護を語るなかで知る誇りと喜び　「ビタミンナースの会」で、看護を語り合う～明日への看護の活力剤～，看護実践の科学，33(5)，p.52-55，2008.

４）通地彩知，東絵里香，澁谷麻未他：経年別比較での看護師のやりがい感の変化－チームで看護を語る場を設けて－，中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，第 7 巻，p.97-100，2011.

引用文献

5）伊良波理絵，嘉手苅英子：病棟看護師が同僚の看護実践から看護職者としての認識や行動に影響を受けた過程の特徴，沖縄県立看護大学紀要第 14 号，p.71-80，2013.

表1．「認識の変化」に関するカテゴリー分類

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
実践できそうな機会はあったが患者家族の状況を考え実践しなかった	機会はあったが状況から実践を見送った	1ヶ月間継続して意識できていた
語りの内容を覚えているが機会がなく実践できなかった。機会があれば実践していたと思う	機会があれば実践したいと思う	
機会は少ないが、語りの内容を実践できそうな場面は浮かぶため今後応用して実践したいと思う		
語りの内容が印象に残っているため、機会があれば今後工夫して実践したいと思う		
他者の語りを聞いて患者さんに活かそうと意識できていると思う		
語る会の翌日から意識したことが今も自然にできるようになり、意識が定着したと感じる	意識が定着したと感じる	
語る会で話したことが普段の看護の中に活かせていると感じる		
語る会の直後はもちろん1ヶ月後も意識できていると思う		
より家族への声かけが大切だと学んでから、実践するにあたり意識している	看護ケアに対する意識が更に深まった	
もともと最期をどう過ごしたいか意識して聞くようにしていたが、語る会で更にその意識が深まった		
語りを聞いて新しく看護としてやっていきたいという考え方ができ、その考えが1ヶ月後も継続している		
今日、明日からできそうな小さなことなら忘れずにできるし、自分の中で考え方を発展させられると思う		
気持ちを引き出すのが難しいと感じる患者もいるが、IC後の反応を確認する姿勢がとても大事だと思ったため、対応が難しそうな相手でも気持ちを引き出すコミュニケーションスキルを身につけたいと思った		
印象深かった語りの内容を気にかけていたが、機会がなく実践にはつながらなかったように思う	意識していたが実践にはつながらなかった	
語る会のような場面にあまり遭遇せず、実践に至った感覚がない		
語りの内容を実践できそうな患者はいたが、受け持つ機会がなく実践できなかった		
語る会で他者に自分の考え方を認められ、否定的だった考え方を肯定的に考えられるように変わった	自分を肯定できるようになった	自己肯定感が上がった
語る会の後、看護に対する自分の考え方をだいぶ肯定的に考えられるようになった		
他者の考え方や意見を知り、1ヶ月の中でも少しずつ自分の看護を改善したりより良くすることができた	自己課題を発見した	よりよい看護を目指す姿勢が生まれた
自分の看護の改善点を見出すことができ良かったと思う		
先輩の話の聞き方や聞くタイミングを学ぼうとするように変わった	他者から学ぼうとする意識が生まれた	
語る会で話した時は意識していきたいと思ったが忘れてしまった	意識は時間経過と共に薄れた	意識は時間経過と共に薄れた
ここ1ヶ月たったので忘れてしまった		
長い間活かす機会がないと、忘れたくなくても忘れてしまうと思った		
語る会の時はすごく刺激を受けたがすぐに実践できないと忘れがちになる		
語る会の直後は話の内容や気にかけたい意識があったが時間経過と共に記憶が薄れていくと思う		
機会がなかったというより忘れてしまったことの方が多い気がする		
語る会後2週間程は良かった内容を割と覚えていたが、1ヶ月経つとあまり思い出さなくなる		
私が忘れてしまっているだけだと思う	単に忘れてしまった	
機会はあったかもしれないが覚えていない		
仕事中に自分に余裕がなくて忘れてしまっていたと思う	日常業務に追われ忘れてしまった	
心がけていても日常業務に追われるといつの間にか記憶が消えてしまうと思った		
6人だと語りの内容が多く、全ての語りを覚えていられないと感じる	記憶に残りづらかった	
語りの人数が多いと、印象に残った話しか抜粋されて残らないが、少ない人数で語れば覚えている感じがする		
1回の語る会では記憶に残すのが難しいと感じる		
印象に残った内容以外のことは変わっていない感じがする		変化がなかった
語られた内容の一部については以前から気にかけていたことだったため、元の意識のまま改善した気はしない		

表2.　「実践の変化」に関するカテゴリー分類

コード	カテゴリー
家族に会ったときに、家族が患者さんに対して心配している面がないか意識して聞くようになったと思う	より患者、家族の気持ちに配慮して話が聞けるようになった
機会があり意識して家族を含めた意見が聞けた	
語る前よりも、家族が患者に言えずに困っていることはないか等意識して聞くことを心がけるようになったと思う。	
患者、家族に、病院の療養生活が自宅と違うことも考えて、最期どう迎えたいかについて以前より話を意識して聞くようになった	
本人だけではなく面会に来た家族への体調の配慮や、終末期で亡くなることがわかっているうえでの転院のIC後の家族の受け止めを確認した。	
患者本人と家族の状態を確認するようにして、今までより少しでも家族の思いを聞けるようになったと思う。	
語る会や普段の退院支援カンファレンスを通して、患者さんはもちろん家族の意見も聞いていこうと意識があり、家族の話を聞くことができた。	
終末期の患者に対し今後どう過ごたいか、家に帰ってどう過ごしたいか、何が一番困っているかを話すことができた	終末期の過ごし方に対する考えを早期から意識して聞けるようになった
BSCでDNARもとれている患者に対して今後の療養先や最期どう過ごしたいかについて入院時から意識して聞くことができた	
患者さんや家族から答えが返ってこなかったり話が逸れていってしまったこともあったが、最期をどう過ごしたいかを前よりは意識して聞くようになった	
語る会から、IC後に患者と家族だけが話す時間を設けることが大事だと思い、実践できた。	IC後に患者と家族だけで話せる場を設けるようになった
語る会翌日に機会があり、意識的に実践した。IC後に患者、家族2人だけの時間をつくり、落ち着いて話し合える場の設定ができた。	
ICのあとに家族だけの時間をつくることが必要だと学んだので、患者と家族が話せるように時間をおいてからICの内容について確認の声かけをするようにした。	
語る会で自分が受けた助言から終末期の患者さんの最善のケアについて考えて活かせた	より患者、家族目線に配慮したケアを考え実践するようになった
語る会で学んだことを活かし患者さんの希望を優先し、一番過ごしやすい環境を調整できた	
家族が嫌な気持ちにならないようにという視点で患者のベッドサイドの環境整備を行うようになった。	
家族が嫌な気持ちにならないように生活環境を整えようという意識が芽生え、習慣付いたと思う	
患者の状態だけでなく環境整備の重要性に気づき、意識して行えるようになった	ケアの必要性を再認識しケアの時間を確保するようになった
語る会で今まで以上に口腔ケアの必要性に気づき、忙しくても自分の勤務帯で口腔ケアを欠かさず行うようになった	